

はじめに

現役東大生や東大出身のタレントを回答者としたクイズ番組やクイズ本などがブームになってから久しいものがありますが、なかなかそのブームは衰えるどころか、むしろ定番のコンテンツになっていると言ってもよいかもしれません。そうしたクイズ番組で現役東大・京大生や東大・京大出身のタレントなどが一瞬で回答したりすると、「よくこんなことを知っているなあ。やっぱり東大出となると、こんな風に人が知らないことも知っているのか」というように思われる方が多いのではないのでしょうか？

しかし、いかにもクイズ番組で問われるような知識（クイズ番組でしか問われないと言ってもよいかもしれません。例えば、「山のつく都道府県は全部でいくつあるか」など）は、東大の入試問題では一切問われません。実際、このような知識のみならず、様々な知識の豊富な東大生は数多くいるでしょうが、知識の多寡が決め手になるような入試問題は、実は東大や京大は昔から一切出題してきていないのです。

英語の場合も同様で、東大・京大の入試問題というと「一般の人が知らないような高度な単語や細かい文法を覚えていないと解けない、読めない」というイメージをお持ちの方も多いかもかもしれません。

ところで、近年 2018 年の東大英語入試問題で、**mammal**「哺乳類」という語句に注が付けられていたことはご存じでしょうか？ 正直、「哺乳類 **mammal**」といった語は東大志望者でなくとも一般受験生のほとんどが知っているであろう単語です。もちろん東大志望者なら当然知っていると思われるのですが、逆に言えばこの程度の単語にも注がつくほど、一般受験生の学習範囲を超えるような（わかりやすく言えば、英検 1 級レベルのような）語句の知識の有無が決め手になる問題は皆無なのです。

最近になって、入試改革で盛んに「思考力入試」とやらが叫ばれていますが、個人的には、何を今更という感が正直否めません。東大・京大は遙か昔（昭和以前）から思考力を問う問題を出題してきました。

もちろん、東大・京大の入試においても、単語に限らず、高等学校で学ぶべき知識は当然必要です。何も覚えていなくても考えればできるというわけではありません。ただし、東大・京大入試はその高等学校で身につけていなければならない最低限の知識を、付け焼き刃ではなくどう運用できるかに加え、その過程をしっかり考え抜くという、いわば近年盛んに言われている「思考力入試」を遙か昔から実践していると言えるのです。

さらに言えば、ただ知っている・見覚えがあるというような、曖昧な知識の持ち主や、何の関連性もなくひたすら知識を詰め込んだだけの「知識モンスター」には東大・京大は門戸を開いてくれないのです。

私は、これまでに『東大英語が教えてくれる英文正読の真相 55』（プレイス）、『英語が面白くなる 東大のディープな英語』（KADOKAWA）と、東大の入試問題を題材とした書物を上梓してまいりましたが、お陰様で今回、上記の拙著をご覧いただいた担当者の方から、今回は京大の入試問題との比較を交えてというお話をいただき、本書の完成に至りました。すでに拙著をご愛読いただいた方はもちろん、新たに本書を手にとられる方で、受験生時代には東大・京大の入試問題に触れる機会がなかった方でも、様々な形式の問題に取り組むことで、出題内容含め、現代社会の抱える数々の課題にも触れることができると思います。その過程で、受験生時代にはあやふやだった英語力そのもののブラッシュアップだけでなく、思考力を磨くことで、文系・理系といった狭い受験の枠組みから離れ、真の教養を身につけるきっかけにさせていただければ幸いです。

佐藤 ヒロシ